

---

# 瞑る少女の花

猫一匹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

瞑る少女の花

### 【Nコード】

N1712T

### 【作者名】

猫一匹

### 【あらすじ】

生まれつき体が弱いフィオリアは療養として西のエリシアーノ国に住むことに。

そこで出会った5人の幼馴染とずっとこの関係が続けばいいと思っていたが、

ある日異世界から一人の少女・立花ひかるが現れて…。

・異世界トリップは二の次！第三者のお姫様をヒロインに描くお話です。

## - 登場人物

フィオリア・ロットリー（18）

北の国エワールの第三王女。

体が弱く、8歳の頃からエリシアーノで療養中。

フィオリアのリアは国花から名付けられた。

性格は大人しいが時折無茶な行動をする。

皆を大切に思っている。

<髪>蜂蜜色・薄い金？

<瞳>琥珀

<呼び名>フィオ

立花 ひかる（17） - 数ヶ月の誕生日の差でフィオリアと同

年代

異世界（日本）から来た少女。

女子高生で両親は他界、あと1ヶ月で卒業だったが突然の異世界召喚。

素直で笑顔を絶やさないが、その分心に溜める傾向がある。

<髪>黒色

<瞳>黒・茶

<呼び名>ヒカル

カイス・エン・エクライヤ（23）

西の国エリシアーノの第一王子。

一直線的な思考があるが頼りがいある存在。

見目麗しくまさに王子。

<髪>金色

<瞳>紫

<呼び名>カイス

ツヴァイ・クローウィン(23)

東の国エイヴァンの第二王子。

13歳の頃勉学のためエリシアーノに一時留学。

その後は各国を周り留学中。眉間を寄せるのはもはや癖。

<髪>藍色

<瞳>空色

<呼び名>ヴァイ

アルリエット・ワイズ(27)

カイスの近衛騎士団・第二隊長。

代々エクライヤ王家に仕える騎士の家系。

真面目で無口、命令にはそつなくこなす。

主従的な身分を重んじている。

<髪>赤色

<瞳>茶色

<呼び名>アル

ロイズ・エンキンス(20)

カイスの側近・宮廷魔術師

カイスの右腕になるため側近となるが、もとは魔術師の家系。

年下がフィオだけなので妹のように可愛がっている。

フィオの良き相談相手。

<髪>栗色

<瞳>紫色

<呼び名>ロイ

ユラン・ウインスキー(24)

エリシアーノ大神官。

女性に見紛う容姿がちょっとコンプレックス。

王子であるカイスに対しても自分の意見を率直に言える。

<髪>白銀色

<瞳>青色

<呼び名>ユラ

エリシアーン

- 西の大国、実権はエクライヤ王家

エイヴァン

- 東の大国、実権はクローウィン王家

エワール

- 北の小国、実権はロットリー王家

エイベリー

- 南の小国、本作未登場

## 第0花 - プロローグ

それは600年の歴史を持つエリシアーノ王国の建国記念の式典の  
最中のこと。

城内に聳える聖堂は建国以前の戦時から建てられたものらしく  
外壁の白煉瓦にはその傷跡が所々残っているものの輝かんばかりの  
白さは酷く神々しいものだ。

その聖堂内では建国記念の式典・・・儀式のようなものが始まって  
いた。

エリシアーノの国王とその息子である王子カイス・エン・エクライ  
ヤが言葉を述べ

神官が神聖なミュールの泉の水を王の持つグラスに注ぎ  
それを王が王家の紋が刻まれた大理石の床に散らすと神官と魔術師  
の祝詞によって

神々しいばかりの青い紋章の光が浮かび上がる。

・・・それが今回に限りグラスに水を注ぐはずの若い神官が緊張の  
あまりにその水を床に溢してしまった。

- - そう、初めての儀式の失敗。

「あっ  
」

誰ともつかない声が聖堂に響いたその瞬間  
紋章が金色の光に包まれ、まるで嵐のような勢いの風が吹き荒れた。  
飾られた王家のタペストリーが激しく揺れ壁を叩き、燭台が一斉に  
倒れたがその火は絨毯に燃え移る前にその風によって一瞬で吹き消  
される。

周囲から驚くような呻きが聞こえ、扉近くの者は一斉に外へ飛び出

した。

飛び出せた者は良いけれど、儀式の中心にいる国王や私達は動くことができない。

しかしひととき大きな嵐が吹き荒れ、とうとう足が我慢できずに崩れてしまう。

- 倒れる・・・？

思わず目を瞑る私の腕を誰かが掴み胸に抱きこんだ。

「ファイオ！」

聞き覚えのある声と顔にかかる栗色の髪でそれがロイズだと気づく。王子の側近である彼が何故、と思ったが微かに入る視界にアルリエツトの姿が見えて安堵した。

アルが王子であるカイスを守ってくれるなら安心だ。

吹き荒れる風と唸る音が怖くてロイの服を掴みながら恐怖に目を瞑った。

どれくらい経ったかわからないけれど

轟々と唸り声のような嵐の音がびたりと止み

次第にゆるくなるロイの腕の中から顔を上げた私の目に



?彼女? が映ったのだ。

まだ眩く淡い光を放つ大理石の床に  
見慣れぬ衣服を身に着け、肩からは艶やかな黒い髪がさらりと零れ  
落ちた  
だけどなによりもこの世界では見たこともない黒い瞳を持った少女が  
足をぺたりと床に落とした状態で

「・・・ここ、どこ?」

そう小さく呟いたのだ。

それが異世界から来た タチバナ・ヒカル と私達の出会い。



## 第0花 - プロローグ(後書き)

初めてのお話。

短編で書けばよかったかといささか後悔しながらですが頑張ります  
!

## 第1花 - エワールの少女

フィオリア・ロットリー      それが私の名前。

北の小さな国？エワール？

その王家ロットリーの第三王女として生まれた私。

フィオリアの名のリアというのは国花である小さな白い花の名だと物心付いたばかりの私にお父様が話してくれたのを覚えている。

11

お母様は優しく朗らかな女性だったらしい。

らしい…というのはお母様は私を生んだあと産後の肥立が悪く私が1歳の頃に亡くなってしまった。だけれどもお母様の優しい声や温もりは微か。

…それでも私は忘れることはないだろう、ずっと。

物心付く頃にはいなくとも

年の離れた姉様たちと兄様たちはとても優しく寂しいとは思わなかった。

しかし私を産んだときの母は妊娠としては高齢で難産だったらしく、そして生まれた私はそのため生まれつき体が弱い。

北の大地のエワール国ではその寒さゆえ私の体調は落ち着くことがなく

見かねた父が私をこの西の大国？エリシアーノ？に療養として移すことに決めたのは私が8歳の頃。エリシアーノのエクライヤ王と父が古くからの友人だったため王は私を快くエクライヤ王家に迎えてくれることになった。

エリシアーノ国に向かう前の数日間は姉様たちと兄様たちが部屋に来ては本を読んでくれた。

「にいさまはエリシアーノに行つたことありますか？」

ベッドから顔だけ出して尋ねる私に

「父上と何度か行つてるよ、このエワールも綺麗だがそれに劣らず綺麗な国だ」

「きれいなのですか」

「ああ、それにエクライヤ王も王妃もお優しい方だ。フィオが心配することはないさ」

微笑んで優しく頭を撫でてくれる温もりに私も小さく微笑んだ。

8歳の娘が療養するには  
幼い私でもわかるほど立派な部屋をエリシアーノのエクライヤ国王  
が与えてくださった。  
白の裏側の部屋だけれど日当たりもよく何より静かで落ち着ける部  
屋。

そして勿論、お父様たちが言うようにここの気候は心地よかった。  
ただ初めこそ急な気候の変化で悪化したりはしたけれど  
それからは以前よりかは穏やかだ。

何かと気にかけてくれる王妃様や優しい侍女たちの姿に  
故郷であるエワールの姉様兄様たちを思い出すことも少なくなはな  
かった。

そんな時は嬉しい反面・・・ほんの少し寂しかったけど。

私が一番好きなものが城裏手の庭園。  
それは私の部屋の窓から見える場所にある。

城正面に位置する庭園ほど大きくも華美でもないけれど  
自然的な木々や花が好きだった。

そして何よりも庭園の奥には  
故郷・エワールの国花であるリアの花が咲き誇っていて  
それが私の心を穏やかにしてくれる。  
小さな白い花と優しい葉の緑がとても愛らしい。

城から少し離れた裏手の庭園ということであまり手入もされてない  
けれど  
生き生きと育つ様子の草花に心が躍る。

見た目ほど丈夫ではない体の私にはそれが何より羨ましく憧れた。

・・・エクライヤ王家の城に移り2週間

日々慣れてきた体調だが油断は禁物だと医者に言われ、  
嫌いな苦い薬を涙目で流し込み、それを見て苦笑する侍女が柔らか  
な毛布をかけて

「さあフィオリア姫さまお休みくださいませ」  
と、微笑んで部屋を出て行くのは毎日の週間のようになってしまっ  
てる。

大きな窓から見える空は青く澄み切って美しいのに  
なのに薬を飲んで昼寝をしなければいけない自分が寂しい。

「・・・さみしい」

その口に出してしまえばもう止まらない。

ゆっくりベッドから起き上がり静かに部屋の扉を開けて廊下を見渡した。

見つければ怒られるであろうが

運良く昼時ということもあり侍女たちも休憩なのか廊下は静けさを保っていた。

王家専用の通路を使ったのも運が良かった。

室内用の履物は生地が薄く、しかも子供の足ではペタペタと音が響く。

それが通常の通路ではすぐにはれてしまうだろうけど王家のみ使える通路だとばれることは少ない。

これから向かう場所を考えるだけで心が躍る。

気が付けば鼻歌を口ずさんでいる自分に気づきなんだか面白くなってきた。

階段を下りて煉瓦造りの門を越えれば目的の場所はすぐそこだった。





## 第2花 - エワールの少女？

何度か通う秘密の散歩はすごく楽しい。

お医者様に貰った薬を飲んで侍女が出て行ったあとにこっそりと部屋を抜け出すという行動はちょっとドキドキして面白い。

とは言いつつも、

これまでに3、4回は侍女に見つかってお説教を貰ってしまった。

けれど彼女らも私が本当は寂しいのを知ってる。

だから本気で怒ったりはしない・・・それにきつとこの秘密の散歩はお説教の回数よりもばれているのだと思う。でも大目に見てくれて見逃してくれてるんだろう。

だから私も彼女たちを心配させないよう

遠くまで行かないし時間もちゃんと決めている。

彼女たちが怒るのは私を心配してるからだってちゃんと知ってるから…。

ある日侍女が教えてくれた。

「3日後に王子のカイス様が東国エイヴァンからお戻りになるそうですよ」

カイス様はこのエリシアーノ国の第一王子で勉学のためエイヴァンに行っているのだと、ここに来た当初に国王様からお話を伺ったのを覚えてる。

でもその王子様が戻ってくるのだと、城内が活気付いている理由もよくわかった。

「カイス様は姫様より5歳上ですけどとても優しい方ですよ」

「…カイスさまはフィオとなかよくしてくれる？」

年上…そのことを少し残念に思いつつ

城内で私に近い年齢はカイス様くらいなので仲良く慣れたら言いと期待していた。

高揚して頬を染めてそう言う私に

「ええ、姫様ならきつと仲良くなれますよ」

と、侍女は笑って頷いてくれたので

カイスさまが戻られる日が楽しみで仕方がなかった。

しかしその当日の私の体調は芳しくなかった。

言えば夜から熱がなかなか下がらなかったのだ。

「楽しみにしすぎて興奮してしまったのかしら」

そう侍女たちは言って「すぐ良くなりますよ」と気遣ってくれるけどやっとなカイス様に会えるというのに熱を出して寝込んでしまった自分の弱い体が悔しくて哀しい…。

せめて御髪だけは綺麗にしましょうと

侍女たちはベッドの横に水差しと洗器を用意して私の蜂蜜色の髪を洗う。

優しく洗って布でしっぴかり水分を拭き取り丁寧に櫛で梳いてもらう。とても気持ちがいい。髪を撫でられたり梳いてもらうと眠くなってしまうのは私の癖。

寝てるために櫛を入れるだけで結ってもらう事はできないけど、綺麗にしてもらえて沈みがちな気分が落ち着いてきたみたい。

「ありがとう・・・」

眠気眼で何とかお礼を言うと

侍女たちにはにっこり微笑んで「これくらいいつでも」と額を撫でてくれた

ふと目が覚めて窓を見れば太陽が真上に上っていた。  
昼を少し過ぎた頃合だろうか。

朝よりか楽になった体にほっと息を付く。

まだ少し熱が残ってる気がしたけどいつものことだから平気。

「シユリー…？」

ずっと見ていてくれたのだろう。

ベッド横の壁際に侍女のシユリーが椅子に座って眠っていた。

彼女は夜からずっと看病してきてくれたのだから仕方ない。

気持ち良さそうに眠っているのを起こしたくなくて

小さな声で「ありがとう」とお礼を言ったけど、シユリーは聞こえていないだろう。せめて良い夢を見れたらいいな。

室内用の履物に足を入れてベッドから起きる。

もう一度窓の景色をよく見ると真っ青に澄んだ空が飛びこんできた。  
今頃はきつとエイヴァンからお戻りになったカイス様の披露宴が行われているはずだ。そう考えると知らず知らず溜息がこぼれた。

故郷のエワールにいた頃一番目の姉様の結婚式の思い出がふとよみがえる。

あれが初めての結婚式で、初めての宴だった…にも関わらず今よりも弱かった体の私は結婚式の半ばから倒れて参加できなかったのだ。  
新しく仕立ててもらったドレスは2時間ほどしか着ることができな

かった。

励ますようにお父様や姉様兄様が入れ替わり立ち代り部屋に来てくれたけど、時折聞こえる宴の音楽や声が気になって仕方がない。それほど興味があったし楽しみにしていたのだ。

だから今度こそと、そう意気込んだのに。  
意気込みすぎたのだろうか…意気込むだけで熱が出てしまう体にはほとと呆れてしまう。

「…いきたかった」

それに会ってみたかった…国王の御子息であるカイス様に。  
今まで私の周囲には大人しかいなかったの。  
5歳差と言えどもまだ年の近い存在に会って見たいという思いが強かった。

だけど諦めたわけじゃない。  
熱といたつたつていつもと変わらない微熱だ。大したことない。  
いつものように笑って大丈夫だと言えれば宴にいけるかもしれない。  
そう考えてまだ夢の中のシュリーを起こそうとした私は  
ふと窓から見える裏の庭園が目に入った。

「そつだ！」

思いつくと私はシュリーを起こさないように

静かに部屋を飛び出した。

手の中には十数本のリアの花。

この城裏手の庭園の奥にこのリアだけが咲く場所があった。

白い花びらに微かに映るピンク色がとても愛らしく、故郷のエワールにはこの花が一面に咲いていた。

王家の紋章にも使われているエワールの国花だからだ。

そしてお母様が一番好きだった花……。

それが何故このエリシアーノ国に咲いているのかはわからなかったけど

このリアの花を摘んでカイス様に差し上げたいという気持ちで私は一生懸命摘んでいた。

会って、渡すのだこの花を……大好きな故郷の花を。

「よろこんでくださるといいな」

そう呟く頃には手の中にはもうリアの花束が出来上がっていた。

「これくらいでいいかも……?」

寝間着のポケットから髪を結ぶためのリボンを取り出して束を結ぶ。しかし寝間着のリボンさえ結んだことのない私には難しく、うんうんと唸りながら結んだリアの花束はお世辞にも綺麗とはいえなかった。

だけど私の髪と同じ蜂蜜色のリボンで括られた花束は可愛くて満足だ。

いまさらだが寝間着のまま来てしまったためロングドレスの裾は土が付き葉が付きと・・・シュリーが見れば絶句しそうなほど悲惨だ。

くらりと、頭が揺れたのはその時・・・

「え、あれ・・・」

なんだろ・・・と思う間もなく体が傾いて

私の体がリアの花の中にトスツ・・・と倒れた。

霞む意識と視界の中で

誰かが私の小さな体を抱き上げる気がしたけどその後すぐに意識が途絶えてしまった。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1712t/>

---

瞑る少女の花

2011年8月11日06時51分発行